

第10回「確かな学力育成プラン」検討委員会 議事録

◆日 時 平成30年1月10日（水曜日） 午後4時30分～午後6時15分

◆場 所 仙台市役所上杉分庁舎 12階 教育局第1会議室

◆出席委員

氏名(敬称略)	所属 職名	備考
荒井 崇	東北大学大学院教授	
板垣 信哉	宮城教育大学特任教授	委員長
大泉 晶子	前仙台市PTA協議会監事	(欠席)
大草 芳江	(有) FIELD AND NETWORK 取締役	
亀倉 靖宏	仙台市立上杉山中学校長	
今野 和賀子	東北福祉大学准教授 (前仙台市立錦ヶ丘小学校長)	副委員長
佐々木 守世	(株) ホームセレクト代表取締役	
針生 真由美	仙台市PTA協議会副会長	
宮本 真由巳	住吉台中学校区学校支援地域本部SV	(欠席)
杉山 勝真	仙台市教育委員会学校教育部長	
佐藤 淳一	仙台市教育委員会学校教育部参事	
猪股 亮文	仙台市教育委員会教育指導課長	(欠席)
三塚 修	仙台市教育センター所長	
春日 文隆	仙台市教育委員会学びの連携推進室長	

◆傍 聴 1名

◆報道関係 ミヤギテレビ

◆配布資料

- ・次第 ・第9回議事録（資料1）
- ・仙台市確かな学力育成プラン2018策定スケジュール（1/10版）（資料2）
- ・仙台市確かな学力育成プラン2018学校訪問計画（資料3）
- ・確かな学力育成プラン2018中間案に関する意見募集（パブリックコメント）の実施結果について（資料4）
- ・確かな学力育成プラン2018中間案についてのパブリックコメントの実施結果（資料5）

◆会議の概要

- 1 開会
- 2 委員長挨拶
- 3 報告（事務局）
 - (1) 議事録について（資料1）
 - (2) 今後のスケジュールについて（資料2）
 - ・パブリックコメントの結果について、常任委員会、定例教育委員会で報告。修正を加え、3月にプランの策定となる。次回検討委員会が最終回。
 - (3) 学校訪問の実施について（資料3）
 - ・小学校2校、中学校2校に訪問し、意見を聴取した。一部の内容についてはパブリックコメントにも出してもらい、資料5に盛り込んだ。
- 4 協議事項
 - ・委員長より、署名は亀倉委員に指名。
 - (1) 教育委員会意見について（資料なし）
 - ・（事務局）昨年、教育委員より中間案について意見をいただいた。一つは、プラン内容の周知についてである。プランは「作って終わる」ではなく、「使って終わる」ということで各方面に周知を図るようという意見であった。このことに関しては、概要版の作成と全教員への配付を考えている。

また、希望制となると思われるが、学校訪問における事務局からの説明、校長会での説明、学力向上担当者へ研修での説明により周知を図ることを考えている。二つ目に、中間案本編のページ数に関して、第4章の個別の事業についてというところに至るまで、現在16ページとなっているが、少なくならないかという意見があった。現在、再編を図っているが、10ページ程度になるように作業をしている。三つ目、特に第4章の中で「検討いたします」という文言が多い、という意見をいただいた。各ページで方向性を示しているところで多く使っており、今後進めていく内容については、しっかりと示すことができるように、「検討」の文言も含めて、方向性の部分を厚くし、充実させるような形で修正作業を進める。

- ・(委員長) ページで言うところが多いのか。
- ・(事務局) 中間案の第3章の終わりまでのところになる。特に第3章は、グラフなども入れてこれまでの成果と課題を記しているところでもあり、また、第4章の実際にどのような事業を展開していくかということに至るまでが長いという意見であった。再構成を含めて、絞っていきけるよう考えている。
- ・(春日委員) 付け足しになるが、中間案の1~16ページのところを整理できないかという意見をいただいた。例えば2~4ページに、仙台市教育振興基本計画との関わりを図に表していたが、これは振興基本計画を見ればある程度分かるということで、こういった部分を検討するよう意見をいただいた。また、第2章で学力をめぐる現状について社会状況も詳しく書いているが、可能な限り簡略化を図るよう意見をいただいた。しかし、第3章は今までの仙台市標準学力検査から見えてきた部分は今回のプランの肝となっている。ここは数値、グラフを明示しながら丁寧に示したいと考えている。
- ・(委員長) 第3章は基礎的なデータなので、最低限示せるとよい。

(2) 意見募集(パブリックコメント)の結果について(資料4)

- ・(事務局) パブリックコメントの意見結果について、実施概要は記載の通り。2番の意見募集結果について、18人の個人・団体から合計61件の意見をいただいた。内訳は表の通り。特に第4章の個別の事業を中心に様々な意見をいただいた。具体的な内容については、資料5になる。それぞれの意見に対して、教育委員会の考え方、現段階の案として記載している。それぞれの意見で同じ回答のものはくくるようにしたり、その他1件と表したりすることである程度整理している。

全体のところでは、業務の見直し、時間的なゆとり、人員の確保、人的支援について意見をいただいた。第2章では、特に読解力の育成について意見をいただいた。第3章では、グラフの見せ方について意見をいただいたので検討していきたい。また、本市の課題となっている自己肯定感、将来への期待感についても意見をいただいた。第4章では、それぞれの事業について多くの意見をいただいた。

<約10分資料を読む時間をとる>

- ・(副委員長) 三点ある。一点目は、資料5のNo.1の意見にあるように、このプランを運用するにあたって家庭や地域でもできることを仕分けして、アウトソーシングする方向に持っていくことが大事ではないかという意見に対して、学校支援地域本部の協力による地域ボランティア、学生ボランティアを活用したサポート体制を取り入れるなど、家庭や地域との連携を積極的に図ることを考えているということが書かれている。実は、12月25日から3日間、東北福祉大学教育学部主催で、東口キャンパスで中学生3年生を対象にウィンタースクールを実施した。塾に通っていない子供は特に大歓迎とし、55人の応募があった。そこに大学の教員数名と学生ボランティアが毎日20~30人がお世話をさせていただいた。可能であれば、来年度夏休み、冬休みにも取り組みたいという話をしている。教員を目指す学生にとっても大変意義のあるものになる。ここにアウトソー

シングする方向とあったこと、No.14の放課後、長期休業中における学習支援についてというところにもボランティアの活用ということが謳われているので、話を出した。

二点目、No.6, 9, 17に遊びと学力との相関を考えるとよいのではないかという指摘があり、このような視点は大事だと思った。そういった視点を取り入れて、これからさらに在り方を具体的に示すことができれば良いと思い、教育委員会の考え方、方向性は大事だと捉えている。特に遊びとの相関といった場合の遊びについて、幼児期のコミュニケーションのある遊びの在り方は大事になってくるのではないかと思う。一人遊びではなく、コミュニケーションを伴う遊びを大事にしながらか相関をみるという視点はこれからも重要になってくるだろう。

三点目、以前、荒井教育長時代に家庭学習ノートの立ち上げに立ち会った一人として、今またさらにこれが継続し、発展していくことをうれしい思いで捉えている。その意義をちゃんと周知しないといけないと思う一方で、この委員会の意見のところに、「小中合同で家庭学習の手引き等の作成に取り組んでいる中学校区も見られるようになってきている」、「親子の会話が広がったという声が寄せられている」とあり、おそらく活用検証もされて、出されていると思う。No.56に親子で一生懸命家庭学習をするので、学校の先生方は子供たちの様子をもっとよく見てくださいという意見もあった。こういったうれしい意見も取り入れることができるならば、これからさらにいい方向に持っていかれると思う。「(家庭学習ノートが)6学年そろっていたらいいよね」という声は作ったときからあったが、その在り方について予算との兼ね合いもあるので、充実させる方向でこれからも考えていければよいと思う。

- ・(委員長) 春日委員より、パブリックコメントの主な意見についての説明ののち、他の委員から意見を出していただく。
- ・(春日委員) 資料5の1ページのところで、パブリックコメントの主な意見としては、学校にできることには限界があるということで、家庭や地域との仕分け、あるいは教員の業務負担軽減、人的配置をもっとしてほしい、ということが実現できればこのプランは有効になるのではないかという意見をいただいた。教育委員会の考え方としては、本プランはC(確かな学力を育成する上で前提となる環境の整備)の部分、Cの領域とは落ち着いた学習環境づくりのプランであり、土台の部分、E(家庭や地域の教育環境の充実)の部分、そういった部分を入れながらプランを立てている。狭い意味で捉えるのではなく、大きく環境づくり、土台づくりも含めたものになっている。具体的には、地域の方々のお力やあるいは学生ボランティアのお力をいただきながら進めていくということでこの部分は書いている。さらに本プランでは、校務支援システムの導入や学校支援地域本部の有効活用ということで、職員の負担軽減も図っていくことを述べているので、そういった部分を含めて回答している。当然、今後も業務改善の効率化や簡略化を進めることで回答を書いている。

先程、今野委員から学生を使って中学校3年生のいわゆる塾に行けない子供たちを対象とした部分というところでは、中間案の35ページにも大学連携による取組の実施に触れているので、そういった部分が実際に進んでいるところである。

第2章では、子供の遊びとの関係ということで触れていた。また、読解力の育成というところで、本市において課題の部分としては読解力との関連を踏まえながら、読み取ったことをどう表現していくかというところに課題があることを書いているので、資料5の2ページ7番の読解力の育成では、授業で学んだことを自分の言葉で表現する力や、複数の資料から読み取った内容をまとめるという、読解力と表現力を一体として捉えているということを書いている。

第3章のところでも遊びの部分が出ているが、読解力が基本となることは先程答えたように、7番の回答にあるように、表現力と総合的に捉えていくということで考えていきたい。第3章の

8番、グラフのつくりでは表記の仕方について検討する。資料5、3ページ11番の自己肯定感のところでは、本市で取り組んでいるたく生き（たくましく生きる力育成プログラム）を中心として自己肯定感を高める授業プランを組み入れている。これを中心に啓発に努めると回答している。

第4章では、今回14番に放課後・長期休業中における学習支援について書いているが、6ページの34、35番、ここでも放課後等の補充学習の推進ということで、現場としてはとてもありがたい取組であると書いている。例えば、専門性のある支援員の配置や学校支援地域本部の力を借りたり、あるいは学生ボランティアの力を借りたり、この辺を手厚くやりたいことを書いている。

4ページの16番のところで、幼児期からの切れ目のない教育活動の推進ということで、ここでも遊びを通して子供たちの意欲を高めたり、非認知的能力を高めたりしていききたいということがあり、事務局でも幼保小連携モデル事業で就学前の遊びを通した育ちや学びを生かしたものを、小学校につなげていくということを考えているということを書いている。

今回特に多かったのが、家庭や地域との教育環境の充実や家庭での学習の充実、具体的には家庭学習ノートの充実が出ていた。家庭学習ノートの作成については、毎年教員を委員として活用検討委員会を開いている。実際に子供と関わっている教員を委員に選んでおり、家庭の方が一緒に学習しやすいような問題の内容や構成等の検討を行いながら、よりよいものを目指していきたいと回答している。

地域関係では学校支援地域本部のことが出ていたが、資料5、10ページの60番、コミュニティ・スクール検討委員会では、地域とともに歩む学校づくりの柱として今まで学校支援地域本部事業を取り上げてきたが、一定の効果を上げている学校支援地域本部事業を生かしながら、コミュニティ・スクールのモデル校による先行実践を視野に入れて、今後仙台ならではの仕組み等を検討していきたいと回答した。

主なものは以上なので、ご意見をいただきたい。

- ・（亀倉委員）今回のパブリックコメントの意見に対しての教育委員会の考え方という説明をいただいたので読んで分かった。答えにくいところも一生懸命回答しているという思いも分かった。ただ、そこにおいて私たちの意見はどのように反映されていくのか。パブリックコメントに対しての教育委員会からの考え方というのがあるので、私たちの立場はどうなるか確認したい。
- ・（春日委員）今日を入れて10回の検討委員会を基にして中間案を作成してきた。我々検討委員会としては一つの完成版と考えていて、それをよりよいものにしたいということでパブリックコメントを受けたところである。このパブリックコメントの中で、見直しが必要な部分や検討が必要な部分があればそれを生かしていくということになる。そのため、パブリックコメントの回答がこれでもいいかということで、あるいは不足がないか、といった部分について意見をいただき、皆さんでつくってきたプランについてより精度を高めていくことになると思う。
- ・（委員長）教育委員会の考え方（案）ということで、この中に参考になることがあればそれでよいと思う。今後の検討課題という形で、広い意味での意見をいただいて構わないと思う。
- ・（春日委員）今まで皆さんでつくってきたものなので、尊重したいというのが委員会の考え方である。
- ・（委員長）新たなパブリックコメントと教育委員会の意見、案をいただいて、今後に生かすということで、またこの場でアイデアや意見があっても構わないと思う。
- ・（春日委員）今回、パブリックコメントで「これはだめ」というのはなかったと思う。できればこういう部分をさらに充実させてほしい、あるいは、このプランは非常にありがたいと。ただそのためには、人的支援がもう少しできないかなどの予算にもかかる部分のお願いもあった。できるだけ可能な改善策を考えながら、また、説明が不十分だったところもあったと思うので、説明を加えながらパブリックコメントの回答をつくってきた。

- ・(佐々木委員) パブリックコメントの結果はどこかに反映されるのか。教育委員会の考え方も含めて、これ自体が公開されるのか。
- ・(春日委員) このパブリックコメントの教育委員会の考え方も踏まえて、最終的にはこのような形で市民の方にプランについてはこのように考えているということをホームページ等で公開する。
 今回のパブリックコメントを受けて、本編に修正が必要だと思ったところを紹介すると、例えば資料5、2ページの8番のグラフのつくりというところでは、より課題がはっきりするように、課題の分かるDから並べたらどうかという意見があったので、本編でも見直していきたいと考えている。
 4ページ16番の幼児期からの切れ目のない教育活動の推進のところ、遊びを通してというところがあり、幼保小連携モデル事業に取り組んでいるので、就学前の遊びを通した育ちや学びを生かした小学校への円滑な接続の重要性を強調した文言に修正を加えたい。
 同じく4ページ19番、表現の統一がされていないという点と、第4章の今後の方向性というところが分かりにくいという指摘を受けていた。例えば中間案23ページのところでは、今後の方向性が箇条書きで示しているだけで、内容まで分からないという指摘を受けていたので、この辺は本編自体も多少修正の必要があると考えている。このように、パブリックコメントを受けて、本編自体の書きぶりも修正を図っていききたい。
- ・(委員長) 委員からざっくばらんに意見をお願いしたい。
- ・(針生委員) 資料5の14番、放課後、長期休業中における学習支援ということで、今、中学校の教員は土日のどちらかは部活動を休みなさいという方向だが、保護者が理解していない部分がある。中学校2年生は部活動も学習面も一緒だと思うが、教えていただく人のフィーリングのようなものが重要視されてくると思う。学校、地域、保護者連携ということで謳ってはいるが、放課後仮に学習支援を行うとしても周りの人材確保も一番大事だと思う。地域の方の中でも以前学校の先生だった方もいらっしゃると思うが、人材を発掘できる統一性のあるシステムというところでの課題となると思う。底辺の吸い上げが重要だと思うが、いろんな人から教われれば、指導の仕方によって子供が困惑してしまうという部分もあると思う。教育面での大事性を考えながら動くとういと思う。教育委員会の考え方(案)ということで、国から示される予定のガイドラインなどを参考にしながら、今後の部活動の在り方も変わっていくと思う。学習も大事だが、運動面できちんとやれる場所も確保できれば、子供の環境も変わると思う。このプランとしては、回答を見ると実現できればという意見が多いので、今後実践していけるように、最終的にできれば良いと思う。先生たちで補えないことを地域で補うということは、いろんな目線から子供たちを守るという面では非常に大切である。こちらのほうも視野に入れながら、皆さんの目で子供の環境がよりよい環境になると良いと思う。
- ・(大草委員) 確認だが、今回提出した人数が18人で、意見計数が61件ということで、1団体で複数の意見が寄せられたと解釈しているが、主に意見を出しているのは読んでいる感じだと学校の現場の先生や保護者、義務教育ではないが教育に携わっている方からのコメントということで合っているか。
- ・(事務局) 合っている。
- ・(大草委員) 私も遊びと学力の相関というところが、大事なポイントだと思う。遊びと学力の相関については複数の意見が見られるが、同一の方が多くの意見を出しているのか、複数の方から意見があったのか確認したい。
- ・(春日委員) 遊びの部分について、まとまっていたりとびとびになっていたりしているが、「遊びを通して」で書いているのは一人である。貴重な意見だと思っている。

- ・(大草委員) 私もこの方の意見に共感している。子供がもともと持っている内発的なモチベーションから、知りたい、つくりたいという気持ちから学力は向上すると思う。その部分が大切だという前提のもとでこのプランも書かれていると思う。ただ、もしかするとこのような意見があるということは、それぞれの取組は大切でぜひ推進すべきものと思うが、逆に推進することにより内発的な遊びの部分とトレードオフの関係が生まれて、内発的なモチベーションを失うほうにバイアスがかかるのでは、という危機感を抱かせる構成になっているのかもしれないという心配がある。そういった視点からもう一度見直す必要があると思う。私が遊びを大事だと思う理由は、今、小中学生を見ていて心配な姿として最近の小中学生はものすごく忙しく、小学生のころから大学試験を意識するあまり、自分が不思議だな、作りたいと思う、いわゆる遊びの中で育むことを価値のないものと思い、それは無駄なものと考えているのではないかと感じる時があり、目の前の試験勉強の数字にとらわれて、大事な部分が失われているのではないかと心配している。様々な研究者の方に科学するときに大事なことは何かという質問をすると、当時は遊びで知りたい、作りたいと熱心に試行錯誤したことが今も大きな礎となっていると口を揃えて話している。パブリックコメントにもあるように例えば東北大との共同研究成果で遊びとの相関があれば、そのデータを出すことで今後に生かせるとよいと思う。

2 ページ 7 番に、読み取ったことを表現する力が不足しているという読解力の課題があるが、表現するスキル以前に伝えようとする意思そのものが弱くなっていると、子供や大学生と接していると感じている。なおさら表現スキル前段の内発的な動機というところが非常に大事なところだとひしひしと感じている。

- ・(荒井委員) 大変多くの意見をいただいてよかった。特に現場の先生方の意見を得られたのは大変よかったと思う。前回の育成プランは 10 年近く前になるが、そのときもやはり先生方は忙しいという意見があったが、データ等を見るとこの 10 年間でさらに先生方の勤務時間が増えている。より多忙化が進んでいる中で新しいプランを打ち出し、また新たな事業を打ち出すということになると、現場の先生方は仕事の量を減らしてほしい、多忙化を何とかしてほしいとなり、プランで示している事業は難しいという率直な意見があつて良かったと思う。そろそろ先生方の勤務時間、負担を増やすのは限界という感じがあるかと思う。意見に合った「仕分け」「アウトソーシング」は先生方の心の叫びかなという感じもする。教育委員会の考え方ということで、学校支援地域本部の協力によって先生方の負担を減らす、ということ念頭において書かれていると思うが、今回のパブリックコメントの先生方の率直な意見に、踏み出した表現をするか検討材料だと思う。具体的な内容としては、例えば、新しく体験活動を休日にやろうという事業を地域の方へお願いしよう、ということは抵抗なく受け入れられるかもしれない。今やっている学校の業務を地域の方々、家庭へお願いする、ということはアウトソーシング、仕分けになる。そういったことをプランの中に表現として 1~2 行入れることを考えてもよいと思った。例えばだが、私が育った埼玉県で、小学校のとき夏休みにプールに入ったが、監視は先生がやっていた。仙台市に来て、親がプール監視をやっていて非常に驚いた。他県等の例を見れば、先生方ができないと考えることで、保護者や地域へお願いできることはもっとあるのではないかと感じる。全くの例だが、実現可能か分からないが、学習発表会の準備なども地域の方や保護者の方に一部分お願いすることができるのではないかと感じる。合唱の指導等は先生しかできないと思うが、既存の学校の業務、行事に関してお願いするようなことを検討するというを仮にこのプラン 2018 に書くと、現場の先生方は「このプランというのは学校現場の事をよく分かっている」と安心する。既存の事業についても学校だけでやるのではなく、地域社会に対してどんどんお願いする方向性のことが一言書いてあると、学校現場でもこのプランの実施に協力していただけると思う。

- ・(亀倉委員) 貴重な意見をパブリックコメントでいただいた点、非常に良かったと思う。また、教育委員会の考え方ということで、現段階では、答えられる言葉を選びながらまとめていただいた。

学校現場はやることがたくさんあり、資料5、1ページ2番目の意見に、「日々やらなければいけないことが多く、今後もさらなる努力をしていかねばと気を引き締めている」とあり、「これ、またこんなにいっぱいくるんだ」「また頑張んなきゃ」という気持ちがあるのだと思った。荒井委員からあったように、委員会としても、これを全部満遍なく取り組むのではなく各学校の実態に応じ、軽重を付けて取り組むことを述べる文章があれば非常に安心すると思う。私の学校も本当に忙しく、伝統的にこの時期に取り組む行事を頑張っている。その中で放課後の学習もやらせたいが、この取組もあるというジレンマがあるため、そういった一文があるだけでも学校現場はほっとすると思う。
- ・(委員長) 9割方予算に係る問題だと思うので、難しいところもある。教育実習は日本の場合4～5週間。欧米では多くは、約3か月半。2～3週間は指導の手間がかかるが、残り2か月半は意外と戦力となるのかなと思う。欧米では教育実習3か月は常識である。教員養成、教育学部といっても先生になりたいかどうかは4年間で変わる場合もある。そういう意味では教育実習も充実しないといけない。3か月の教育実習であれば、各学校の人的支援という形で組み入れられるかなと思う。
- ・(荒井委員) 教育実習の学生を指導する先生方の指導の手間、負担を考えると実現不可能かと思う。
- ・(亀倉委員) 実習生を毎年たくさん預かる。後輩を育てるという観点から、お願いすると言われた先生は一生懸命指導するが、負担は多いのが事実である。また、大学によっては、しっかりと事前に指導して臨んでくる学校もあれば、ほとんど学校現場に最初から指導してください、という形の大学もあり、大学の先生が来たときに、改善していただけるようお願いしている。

実習が終わった後、「行事に取り組んでいるところだけでなく、作り上げる過程もしっかり見ていって」といったことも可能な学校は多いだろうから、そういった形での長期の受け入れも可能となると思う。
- ・(委員長) フィンランドでは長期に渡った教育実習で、一つの授業で担当の先生プラス二、三人インターンシップで授業をサポートしている。教育実習も何らかの形で学校の支援となればいい。
- ・(春日委員) 皆さんからいただいた意見の中で、例えば人的支援のところ、地域の方や学生の協力を得ること、自分づくり教育では企業の方の協力を得るということがあがる。本編のどの部分になるかわからないが、書き加えながらさらに色濃く出るように工夫したい。大草委員による遊びを通した子供の主体的な学びについては、今回の策定のポイントということで、本編の18ページの「切れ目のない教育活動の推進」の部分であるが、読み返すと若干薄いと思う。ここには非認知的能力ということで忍耐や自己制御、自尊心の部分を幼児期から育てていくことを書いているが、付け加えながら第4章の中の幼保小連携で文言の追加を検討したい。
- ・(委員長) ヒアリングに参加したときの意見だが、家庭学習ノートについて、父兄の対応が様々で先生方の想定を超えるものもあるといった意見があった。今後いろいろと改善する方法があると思うが、方向性は見えているか。また、書き加えることはあるか。
- ・(春日委員) 家庭学習ノートについて、保護者の方へのアナウンスの仕方に課題がある。家庭学習ノートの中に「保護者の方へ」という手引きをつけているが、工夫しながらより使いやすくしていきたい。子供と親との家庭学習ノートを通した触れ合いが非常に大事であることを掲載し、より使いやすい工夫についても今後考えていきたい。
- ・(大草委員) 遊びの項目の件で一つ意見だが、遊びについては幼保小連携の取組について明記してあり、ここを色濃くしていくというお話だった。科学的な根拠は知らないが、自分の経験から痛感することとして、おそらく遊びというのは小さいときだけでなく、小・中・高と段階的に大事な要素

だと思っている。小学校以下のときだけというように、限定的に書かないほうがよいのではないかと直感的に思った。遊びの中で育まれるのがいろいろな能力であり、自尊心、忍耐力、人間関係調整能力、コミュニケーション能力等々あるが、ここに書かれてないこととして知的好奇心は学習する意欲や態度という素地と言われるものに密接にかかわるところであり、遊びで育まれるところだと思う。見た目は学力に直結しないから、無駄なことに思って省略されてしまうのかもしれないが、それが無いから素地が弱くなっているのではないかと思う。NPOの活動で大学生を多く育成しているが、遊んでいる経験が少ないため、いざ自分で遊ぼうと思って遊べない。遊びというのは自分でいろいろ試行錯誤することなのに、それができなくなっていると感じている。遊びの要素を小さな幼児のことに捉えて限定するのではなく、学ぶ態度、意欲につながるものとしてもう少し広く捉えられる形にするとよい。

- ・(春日委員) 今回の学習指導要領で幼児期からの切れ目のない教育というのは、幼児期にこそ学びの本質があるのではないかと、ということを謳っている。小学校、中学校に入ると教科の枠があるが、今回の幼児期からの切れ目のない教育ということで、遊びを通した学びを単なる接続期間の小学校1年生だけでなく、学びの全体を通してやっていこう、ということで今回教科横断的な取組や、例えば総合的な学習の時間の形で重視されている。遊びを通した子供の主体的な学びの姿というものを、教科の中でも生かし、総合的な学習の時間でも生かしていくということで、大草委員が話した部分を学習指導要領でも大事にしていくという指摘がされているので、表現にも工夫していきたい。
- ・(佐々木委員) 先程、先生たちが忙しくて、さらにまた忙しくなっているというお話が出ていたが、おそらく、この育成プランも含めて、いいものをつくろう、つくろうとすると、それなりに課題の解決を図る理由があるわけで、この課題を解決すればもっと良くなるのではないかとというのが大前提である。当然こういうものをつくると量が増える、さらに忙しくなるという悪循環は必ずあると思う。民間の企業でも仕事の課題を解決する上で何かを起こそうとすると量が多くなる、というのはどこも同じであると感じていた。しかし、企業が違うところは、モノを捨てる勇氣があるところである。例えば将来性のないもの、利益率が低いものに関しては、企業は「これはやめましょう」という勇氣を奮うことができる。おそらくこのくくりの中では、モノを捨てることができないと思う。優先順位をつけることや、中期長期的なものも含めて、環境を良くするための一環であって将来的には非常によくあるものでもあるという安心感的なところを付け加えた上でこのプランがあるということの話があってもいいと思う。例えば、ヒト・モノ・カネ・時間など、おそらくこの全てのものはすぐ解決できるものではない。また、環境整備ということに関しては中長期で取り組める視野があるのではないかと感想を持っている。差支えなければ、専門的なところで時間を設けるなど、中長期にわたって環境整備にも取り組むような意向があれば、案というところも付け加えながら、「今この学力育成プランが一番ふさわしいから、これに向かって頑張って取り組んでいきましょう」という形からスタートしていければ、先程気を引き締めているところという話もあったが、苦しんでいく形の考え方ではなく、未来に向かって楽しく前向きに子供たちのために進んでいる、ということを見せていければよいと思う。
- ・(委員長) 資料5の2, 3ページ第3章のパブリックコメントの自己肯定感、学ぶ意欲、期待感という言葉の概念について。中間案で言うと図15, 16。学ぶ意欲や自己肯定感、期待感という概念自体が、小学2年生から中学3年生まで同じ質問項目になっている。小2から中3まで概念的に違う。肯定感という自分に良いところがあるという良いところの概念の捉え方が、発達的に捉え方が違ってくる。楽しいという概念自体も発達段階によって捉え方が違う。学習意欲や自己肯定感がなくなるわけではない。小2から中3まで同じグラフに表すのは無理があると思う。グラフはあくま

で量的調査結果であり、質的研究はかなり困難を伴うものであり、このことは今後の課題である。委員会としては、その点に触れる必要があるかも含めて検討していただきたい。

- ・(春日委員) 確かに小学2年生から中学3年生まで一つの指標だけでどうか、ということもあり、市教委では東北大学との共同研究の中で質問項目自体を見直す機会を設けている。例えば自己肯定感については「自分には良いところがある」という一つの指標で見えてきたが、H27年度から自己肯定感に関わる質問項目を増やし、精度を高めている。自己肯定感に限って言えば、性差もあり、女性の方が中学生になると下がってくるということがある。全て同じ尺度で見るということは、性差等もあり、東北大学との連携では、そういった視点をもって分析している。また、質問項目の検討も加えている。文言等の検討も含めて触れている。
- ・(委員長) 量的変化と質的变化の分析は大きな課題である。外国との比較の際は多くの場合、量的比較であり、質的な比較は課題である。
- ・(佐藤委員) 自己肯定感に関して、委員長が話したように学年進行で低下する傾向があることは見てきた。ここで大切にされた視点でもあるが、小2は小2で、中3は中3で毎年とっているのだから、そのときの学年でどう変化したかということが分かる。一番心配だったのは、震災後にドンとどの学年も下がったことである。これがずっと低下したまま、もとにもどらないという傾向が続いたことが心配だった。危機意識を持って自己肯定感の向上に全校的全市的に取り組んだが、その中で2年前から徐々に回復し、特に中学校はかなり早い段階で震災前を越えた。学年進行で見るというよりも経年変化を定点の変化で見ると小学校6年生では全国平均を下回り、全国でも最下位という状況で、年度が進んでも進行していく危機的状況化にあった。そういう分析の視点として見ていた。将来への期待感についても、同じ傾向が出ている。震災からどんと下がったまま、戻ってこない。ここはなぜかというのが大きな課題として、このグラフから読み取ることができる。学年進行によって下がるという視点ではなく、学年進行によって下がる傾向なのに、それがさらにどの学年でも下がる、それも震災という一つの基準値があり、そういう傾向が出たときに、我々がどう受け取って改善していくことを見取るグラフである。もしかしたら説明が足りなかったかもしれない。
- ・(委員長) 文章を工夫して入れられれば、入れても良いと思う。

5 事務連絡(事務局)

- ・議事録はメーリングリストで後日送信する。
- ・次回の連絡(次回:第11回 2月中予定 教育局第1会議室)

6 閉会

平成30年2月9日

署名委員

亀倉靖宏(こむらぎ せいこう)